

て、缶詰の空カンで湯がいて塩をかけ、空腹の足しにする。

もちろん、便所は野良に穴を掘り、丸太橋、下は真っ青の泥海のよう。幸いにして生き残った人たちも、生ける屍同然、三年目の冬を迎え、あたりは銀世界となる。

零下三十度。

十一月半ばころだったか、またダモイ東京、だまされたと思いつつ、貨車に乗せられる。何日だったか走り続けた。今度こそ本当の潮の香りのする港に着いた。大きな舟が岸壁にいる。日の丸の旗がひるがえて見える。祖国の旗日の丸。その喜び一生忘れることのできないうれしさであった。本当のダモイ東京が実現したのだ。

どんなにかこの日を待ちわびたか、青ざめたみんなの顔が幾分赤みがさして見える。帰ったら腹いっぱいめしを食いたい。一列に順番の乗船、入り口にて手厚く厚生省の係官から「御苦労様でした」とかけてくれた言葉、どんなにかうれしく、また安心したことであろう。

ナホトカ出港、舞鶴に着く。船内ではそちこちで感情の爆発、ラーゲル生活、赤化教育の恩返しとでもいうべ

きか、仕返しである。「この野郎」の言葉がそちこちで大声に聞こえる。船内の係官の注意もあり、大事に至らず、祖国の上に第一歩を踏みしめたのが昭和二十三年十月二日四日であった。うれしさは忘れることができない。

上陸を終え、今度は一人一人米軍から個室に呼ばれ、ソ中のあらゆる見たこと、聞いたこと一切を調べられ、メモにおさめられ、厚生省から各自引揚証明書に手当金を頂戴して、故郷に帰る客車に乗せられ、ようやく自由の身となった。

抑留中、尊い犠牲となられた多くの戦友に、心から哀悼の言葉を捧げ、恒久平和を祈りつつ、思い出を綴ってみました。

騙されて地獄の二年

新潟県 三間 國 松

終戦、ソ連の支配下にはいった私達松輪島部隊は、九月二十六日、ソ連輸送船に乗せられ、南下、船底につめ

られ、むし暑く、人いきて倒れる者が続出、ソ連船員は甲板から船底へ大きな吹き流しで風をいれ、助かった。ソ連船員はヤボンスキーダモイハラシヨと言った。誰かが、稚内だ、帰れるぞ。船内は喜びにわいた。しかし、船は北へ。我々はどこへ連れて行かれるのか。

間もなく船は港に着く。沿海州ソフガワニ港だ。ソ連船員にまんまとだまされた。すぐに上陸が開始され、休むまもなくソ連兵はビストラダワイ、手をふった。山道を夕方から朝まで、小休止二回、夜通し歩き続けた。途中、のどがかわき、車あとのたまり水を飲んだ。東の空がうすあかるくなってきた。

森林地帯の鉄さくのまわった、四人の古い収容所、倉庫の様ななかは空っぽ、全員附近の木を伐採、丸太で二段の寝台をつくり、その中に収容された。

日夕点呼のとき、中隊長は「我々は国のためにソ連で働くのだ。働かざる者は食わざる、ソ連という国はそういう国なのだ」。皆顔を見合わすばかり。丸太の上に毛布一枚では、体が痛く、ねれない。食糧も、乗船以来、乾パンばかり。はじめ、ソ連の黒パンはのどに通らな

かった。これがソ連の主食であると言った。なれない伐採作業で、けが人がぞくしゅつした。

二週間後、私達は小隊編成で山中の仮収容所幕舎にうつった。おもに伐採作業、食糧は黒パン三百グラム、大豆飯盒のふたに八分である。ソ連では、捕虜に対し黒パンのほか、魚、肉、塩、砂糖、野菜等、規定されている。山の中のラーゲルでは何もない。主食の黒パンでさえ、炊事馬車が二十キロもあるパン工場までいく。倉庫にパンがなく、からもどりがたびたびあった。

草もはえていないツンドラ地帯では、食べる物が無い。木の皮をかじり、松の根をきざみ、飯盒で煮て食べ、飢えをしのいだ。隣の戦友は、凍った馬糞をジャガイモと思い、ひろって室内に馬糞のにおいが鼻についた。飢えて栄養失調の体で重労働は、あまりにもひきさんなものだった。体験したものでなければわからない。

餓死する者が続出。作業人員がへり、作業は出来なく、食糧の見通しが立たず、作業が打ち切られ、次のラーゲルまで十キロの山道を歩かされた。ここも幕舎の仮ラーゲル。山奥、また山奥、食糧のとほしい仮ラーゲ

ルを転々、山道を歩くにもころぶ者が多く、起きあがれない者もいた。「しっかりしろ、祖国に帰るまで死んじやならない」、抱き起こしたが、息を引きとった。いき地獄だ。

どういう経路になったのか、ソフガワニにきた。長かった山の仮ラーゲルから街に出てきた感じである。ここは一個中隊規模の中級ラーゲル。切株ダイナマイト発破作業、夜間作業はダンブカーに手で株土の積込み作業。栄養失調の体で、この作業はとてまたえられるものではなかった。

夜空を見上げ、頭上に北斗七星が南の方向に輝いている。だいぶ北の国にいるのだなあと考えた。零下五十度以下の夜間作業は息もおおり、防寒手袋をしていても、凍傷をさけるため、手をさするのが精一ぱい。とてもひどい、たえられるものではない。

ソ連の規定では、零下三十度になると作業中止になっている。我々には適用されていない。私は長い山の仮ラーゲルの、栄養失調と疲労のかさなりで倒れ、高熱、肺炎と中耳炎で入院した。ソ連の若い女軍医は、私をよ

く治療に当たってくれた。感謝するが、耳は難聴になったが、命をもらって二か月あまりで退院、女医の好意でラーゲルは無理、病院の勤務に残してくれた。

仕事は馬橋、ロシア馬はすこし小さくおとなしい。これはいけると思った。病院の資材運搬はよかったが、戦友の遺体運搬は悲しかった。基地まで五キロ、馬橋に三遺体ずつ。基地を掘り返して、途中、シベリアツツジを折って、うめて、これを立てて合掌した。自分もこの姿になるのかと涙が出た。

病院の勤務も一か月、オッペのラーゲルにも一か月、ソフガワニからムーリに移った。ドアラゲルという一個連隊規模の、初めて大きいラーゲル。ここはノルマによってラポーターグループ別に食糧がくばられている。内務班長の指示で働いている。皆階級章もつけて、軍隊そのままだった。

私は関東軍の工兵隊の仲間に、ラポーターは建築だった。ラポーター指揮の小隊長は、ノルマがあがらないことを理由に営倉にはいっていた。私は週番上等兵の時、炊事から出るスープを各隊の飯盒に分配、ジャガイモが

多い、少ないで「今日の週番上等兵は誰だ」と、私を全裸にしてつりあげ、むち打たれ、体中紫色に血がにじみ出て、殺されると思った。飢えとのたたかいであった。

私もオッペで、ソフガワニに返された。ラポーターはない。名簿調査が行われ、一人一人名前が呼ばれ、日本軍服に着替え、ダモイかも知れないと喜び合った。翌日、ソフガワニ出発、三日目、ハバロフスクについた。カンポイは乗りかえだ、おりろ、ダワイ、ダワイ、農場のラーゲルにはいった。乾燥草の草刈作業、ソ連のカマンジールは、私に馬車をやれと言った。私は又遺体運搬ではとことわった。ヨッポイマーチとおこった。

二週間後、ハバロフスク出発、一路ナホトカについた。ダモイだとわかった。港には船はない。ポンポン船に乗り、ウラジオストツクの魚の水揚缶詰工場に上陸、ソ連の婦人達と一緒に働いた。さばを盗んで食べすぎ、下痢をおこして困った。

ソ連のマダムから赤いネッカチーフを貰い、赤旗を作り、作業の行き帰り、赤旗の歌を歌い、共産党教育に励んだ。一か月、再びナホトカへ。引揚船は横づけになっ

ていた。船体に遠州丸と書いてあった。

乗船、デッキに立って、抑留生活はどこへやら、頭の中は祖国日本。シベリアの地眺めずにはられない。よく生きてきた、不思議に思う。船は動き、船内皆の顔も微笑、静けさ。二日目、日本が見えたぞーと甲板に出て、おお、日本の山々、皆抱き合って泣いた。やがて舞鶴港にはいる。